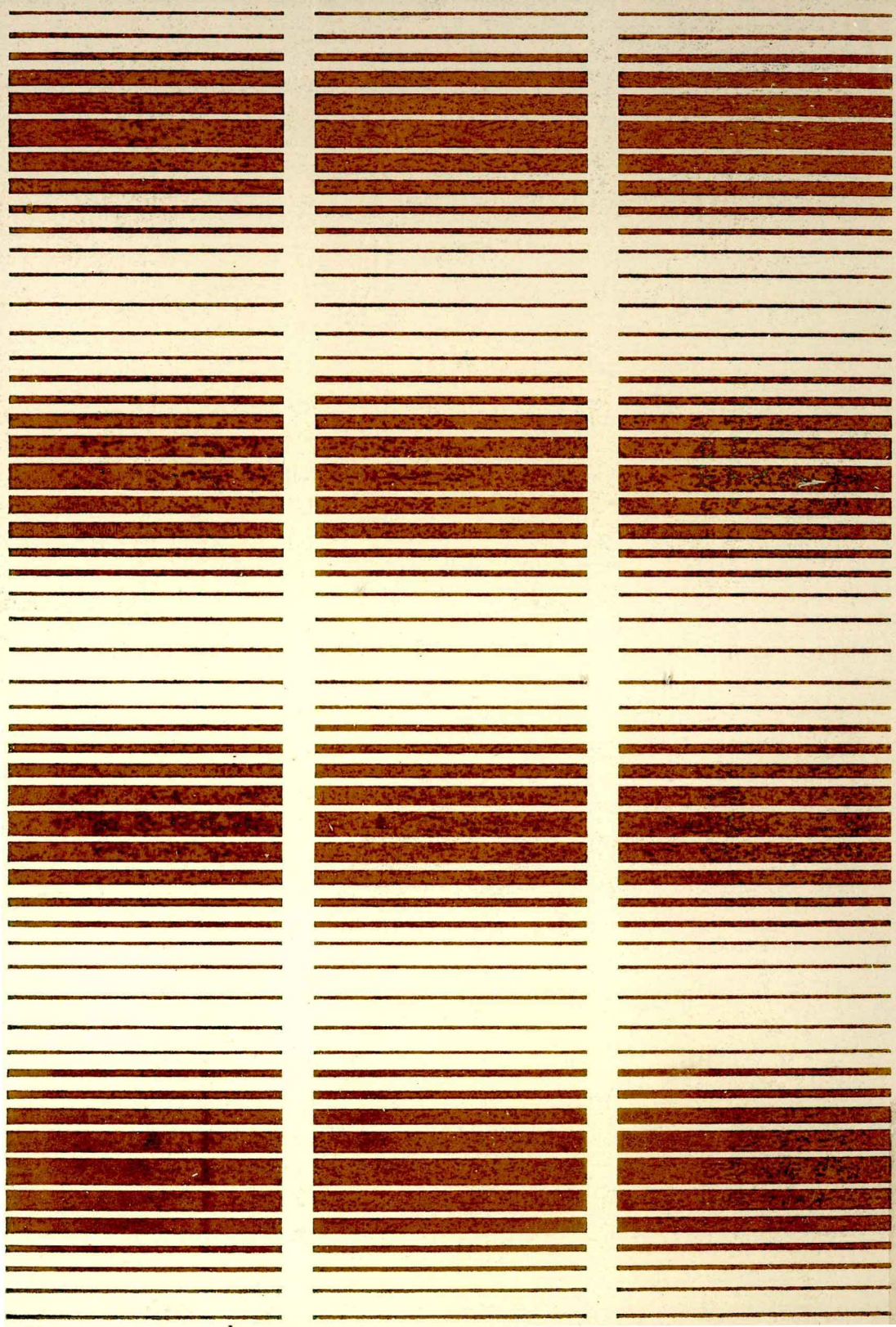
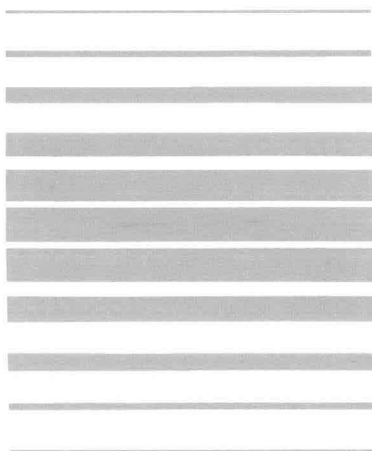




世界文学全集 36

アブサロム、アブサロム!

フォークナー



集英社

アブサロム、アブサロム！
死の床に横たわりて
エミリーに薔薇を 他

訳者 篠田 一士
佐伯 彰一
西川 正身

昭和49年 8 月30日印刷
昭和49年 9 月25日発行

編 集 株式会社 綜 合 社
101 東京都千代田区神田神保町 3-6
電話 東京 (239) 3811
発行者 陶 山 巖
発行所 株式会社 集 英 社
101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-10
電話 東京 (265) 6111 振替 東京15653
印 刷 凸版印刷株式会社
製 本 中央精版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取りかえいたします
定価はカバーまたは帯に表示されています

0397-116036-3041

目次

アブサロム、アブサロム！

篠田 一士 訳 3

死の床に横たわりて

佐伯 彰一 訳 275

エミリーに薔薇を

西川 正身 訳 407

髪の毛

西川 正身 訳 418

乾いた九月

西川 正身 訳 434

後記・注解

447

解説

佐伯 彰一

451

年譜

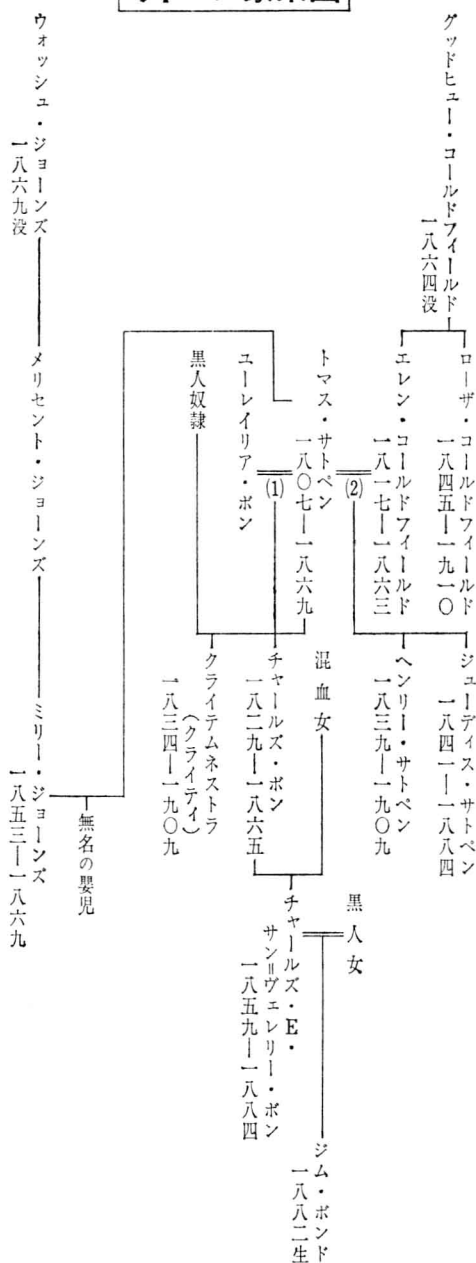
465

著作年譜

483

ア
ブ
サ
ロ
ム、
ア
ブ
サ
ロ
ム
！

サトペン家系図



一

長い、静かな、暑い、ものうい、死んだような九月の午後
の、二時を少しまわってからほとんど日没まで、彼らは、ミ
ス・コールドフィールドがオフィスと呼んでいる部屋に坐っ
ていた。彼女がその部屋をオフィスと呼ぶわけは、かつて彼
女の父親がそう呼んでいたからであった。その薄暗い熱気の
こもる風通しの悪い部屋は、彼女がまだ幼少のころ、だれい
うともなく陽や風が当たると熱気が入るとか、暗いほうが涼
しいとかいわれていたもので、四十三年間もブラインドを完全
に閉めきつたままになっていた。それがやがて（その家のそ
ちら側に陽射しがまともに当たってくるにつれて）こまかい
埃のいっばいたちこめる黄色い線条で格子縞になつてきたが、
その埃をクウェンティンは風にでも吹かれたときにブライ
ンドから剝げおちて部屋のなかに吹きこんできた、かさかさに
乾からびた古ベンキの微粒子だろうと思つていた。ひとつの
窓の前にある木組みの格子にはその夏二度目のウィスタリア
が咲き乱れ、そこへときおり気まぐれな風に乗って雀がやっ
てきては乾いたあざやかな埃っぽい物音を残して飛び去って
いった。クウェンティンの向い側にはミス・コールドフィー

ルドが、姉のためか、父親のためか、夫ともいぬ男のため
かは知るよしもないが、もう四十三年も着たまの永遠の喪
服をつけ、背のまっすぐな固い椅子にまっすぐ背をのばして
坐つていたが、椅子が高すぎて彼女の足は子供の足みたいに
意のままに動かぬもどかしさをただよわせながら床までとど
かず、まるで鉄の脛骨と踝をしていられるかのようになつて
硬直したようにぶらさがつていた。そしてあの冷厳な愕然と
したような唖れ声でしゃべりつづけるので、しまいには聞い
ているのがうとましくなり、聴覚がいつしか混乱して、彼女
の弱々しいがきらめきれない挫折した夢のとうに死滅した
対象が、またしても狂おしい思い出に呼びさまされたように、
音もなく無愛想にそっくりそのまま、永劫にしづまることの
ない夢のような勝ち誇つた埃のなから立ち現われてきたの
だった。

彼女の声はとだえたのではなく、まるで絶え入るように消
えていったのだ。残酷な不動の九月の太陽に照りつけられて
かさかさに乾ききつた外壁を背景として、二度咲きのウィス
タリアの花の、甘い、あまりにも甘い香りにむせかえる薄暗
い屍棺の匂いのする木陰があり、そこへときおり雀の群れが
やってきては懶惰な子供がありふれたしなやかな棒切れを鞭
打つような大きな羽搏きの音をたてて埃を舞いあげていた。
それにまた、彼女の青白いやつれた顔が、まるで磔にされ
た嬰兒といった格好で腰かけているその高すぎる椅子から、
両の袖口と鈴元を結ぶほのかかな三角形のレースごしに彼を見
すえているときの、長すぎた処女性のように立てこもつてき

た女体の老醜のいやらしい匂い。とぎれるのではなく、乾いた砂地から砂地へと流れる小川が細流のように、消え入ったかと思うと長い間をおいてまた現われてくる声——と、あの亡霊が、まるでその声に、もっと運がよかったら一軒の家を持てるどころだったであらうその声に、のりうつったかのようになつて、幻影のごとく従順に考えこんでいるのであつた。静かに雷鳴がとどろいたと思うと、学校賃にかがやく水彩画とでもいった平和な品位ある風景のなかへ、彼（馬に乗った悪鬼）が突如として闖入してきたのだった。その髪や衣服や顎ひげにはまだ焰硝の煙がかすかにこもっていた。そして背後には、人間なみに直立して歩くことにまだ慣れきつていない野獣とでもいったような粗暴な黒んぼの一团が、野人の冷然たる態度で従っていたが、そのなかに手枷をはめられたフランス人の大工がひとり、ぞっとするほどやつれはてて悄然たる姿をさらしていた。馬上の男は身じろぎもせず、顎ひげを生やして掌を上にならべていた。その背後には粗暴な黒んぼたちと囚われの大工が音もなくひしめきあい、血も涙もない矛盾した話だが、手に手に平和的征服の手段たるシャベルやつるはしや斧を持っていた。それから長いあいだ驚いたようすもなく、クウェンティンは、彼らが突然こののどかな百平方マイルの土地に侵入してきて恐慌をひきおこし、邸宅と格式ある庭園を沈黙の無の世界から荒々しく引きずりだすと、それらを、まるでトランプの札でもテーブルの上にたたきつけるように、掌を上にならべて身じろぎもせずふんぞり返っているその男の足もとにたたきつけて、大昔の〈光あれ〉み

たいに「サトベン莊園あれ」というわけで、サトベン莊園なるものをつくりあげるところを、まのあたりに見ているような気持であつた。すると聴覚がひとつに溶けあつて、彼はふたりの別々のクウェンティンの声を同時に聞いているような気がしてきた。一八六五年（南北戦争終結の年）以来消滅し、饒舌で乱暴で夢やぶれた亡霊たちのひしめく奥深い南部にあってハーヴァード大学の受験にそなえながら、おおかたの亡霊のようになしと永眠していることを拒絶して昔の亡霊時代のことを語りかけてくる亡霊のひとりに耳を傾けている、また傾けずにはおれないクウェンティン・コンブスンと、まだ亡霊になれるような年嵩ではないが、そうはいってもしよせん彼女と同じく奥深い南部に生まれ育ったからにはいずれば亡霊たることを免れないクウェンティン・コンブスンと——このふたりの別々のクウェンティンが幻影たる者の長い沈黙のうちに、言葉にならぬ言葉をもつて、こんな対話を始めたのだ。〈どうやらこの悪魔め——やつの名前はサトベンだったな——（サトベン陸軍大佐さ）——サトベン陸軍大佐か——どこからともなく前触れもなしに見えない黒人どもの一団を従えてこの土地に現われ農園をつくりやがった——（むりやり農園を奪い取ったとミス・コールドフィールドはいっているぜ）——むりやり奪い取ったのさ。そして彼女の姉のエレンと結婚して息子と娘をひとりずつ生ませたんだ——（ミス・ローザ・コールドフィールドの話だとちょっとやさしいところのない生ませかただったそうじゃないか）——ちっともやさしいところのない生ませかただった。子供たちはやつらの傲慢の宝石、老後の楯でも慰めでもあつたはずなのに——（子供たちがやつ

を破滅に追いやったかどうかしたのか、それともやつが子供たちを破滅に追いやったかどうかしたのか、ともかく死んじゃった——死んじゃったのさ。ミス・ローザ・コールドフィールドの話だと悲しむ人もなかったっていうじゃないか——（彼女は別さ）そう、彼女は別だ。（それにクウェンティン・コンブスンもだ）そうだ。それにクウェンティン・コンブスンもだ」

「あなたはハーヴァードの大学へ入るために遠くへ行かれるそうですから」とミス・コールドフィールドはいった。「いつかまた当地へ戻られ田舎弁護士となってジェファスン（架空の郡役場のある町）みたいなちっぽけな町に定住なさるだろうとは考えていません。なにしろ南部には若い人たちに残されていゝるものなどほとんどないことぐらい北部の人たちはとうに知っていますからね。ですからたぶんあなたは多くの南部出身の殿方やご婦人連も現にそうしているように文筆活動に入られることでしょう。そうすればいつかこのことを思いだしてそれをお書きになるかもしれませんね。そのころになればあなたは結婚なさってることでしょうし、おそらく奥さんが新しいガウンをねだるとか、お宅に新しい椅子を欲しがるとかするかもしれないでしょうから、そうしたらこのことを書いて雑誌に寄稿なさい。そうすればおそらくあなたはこんなお婆ちゃんでもやさしく思いだしてくださるでしょう。あなたが同じ年頃のお友だちと外出するつもりでいらしたのに、あなたとはなんのかかわりもない人たちや事件のことをこうしてお話するあいだ、あなたを部屋（お婆ちゃん）のなかに坐らせて聞いてもらい、せっかくの午後をまるまるつぶしてしまつた

このお婆ちゃんのことを」

「はあ」とクウェンティンはいった。へあのひとは本気であんなことをいってらんじやない。それをひとに伝えてもらいたいのからだ」と彼は考えていた。時間はまだ早かった。昼ちよつとまえにニグロの少年から手わたされた書きつけを彼はまだポケットに入れていた。それは、面談したくご足労ねがいたいという趣旨のもので、事実上ほとんど別世界からの召喚状とでもいうべき、奇妙な、堅苦しい、形式ばった依頼状——古ぼけた良質の一見変わった古風な便箋に、達筆ではあるが衰えを感じさせるくずした字体でしたためられたもの——であつたが、自分の三倍もの年嵩で、しかもそれまでに面識はあつたがあまり言葉をやりとりしたこともない婦人からの呼び出しにびっくりしたせいとか、それとも彼がまだ二十歳そこそこの若僧にすぎないという事実のせいだろうか、彼はその字体に、ある冷やかな、執念ぶかい、無慈悲でさえある性格があらわれていることに気づかなかつた。彼は昼食後さっそく呼び出しに応じ、自宅から彼女の家まで半マイルの道のりを、九月初旬の乾いて埃っぽい暑さのなかを歩いてきて、それから家へあがつたのだつた。その家にしても、これまた実際の大ききよりやや小さく——一応二階建てだつた——ペンキも塗らず、うす汚れていたが、しかし彼女と同様それが實際に置かれてゐる世界よりもあらゆる点ですこしずつ小さい世界になんとか適合しかつ補足するようにつくられたかのように、不屈の忍耐をつづけているといった趣があつた。この四十五年間むなししく回帰した、熱氣の重荷にあえぐのろい時間の溜息

のいっさいが、まるで墓場に閉じこめられたようにそこに幽閉されてあるかのように、戸外よりも熱気のひどい、鎧戸を閉めきった玄關の暗がりのなかで、衣ずれの音きえたてない喪服をまとったあの小柄な姿、袖口と衿元の青白い三角形のレース、もの思いにふけているような切迫した真剣な表情をして彼を見つめているあのおぼろな顔が、彼を招じ入れるために待っていたのである。

「その話をばくからひとに伝えてもらいたいからなんだ」と彼は考えた。このひとが今後けして会うこともなくその名を聞くこともないような人びと、このひとの名を聞いたこともこのひとの顔を見たこともないような人びとに、いつかそれを読んで、結局なぜ神さまがわれわれを戦いに敗れさせたのかを理解してもらいたいのだらう。つまり南部の男たちの血と南部の女たちの涙を代償としてはじめて神さまはこの悪鬼の跋扈を押え、こいつの名と血筋を地上から抹殺しえたのだということを、それから彼は、そのすぐあとで、こういったことは彼女が手紙をよこした理由にはならないし、またそれを送るにしても特に自分に宛ててよこす理由はないはずだと判断した。なぜなら、もしその話をひとに伝え、ものに書き、活字にしてもらいたいだけのことだったら、わざわざひとを呼びつける必要などなかったはずだからである。なにしろこの婦人は彼（クウェンティン）の父親がまだ若かったころ、なにか烈しい執念のような持ち前の負けずらいから、郡新聞の狷介で貧弱な署名文芸欄に頌詩とか讃歌、碑文、詩といった詩歌を寄せ、この町の、この郡の、女流桂冠詩人としてすでに令名を馳せていたのだから。

彼女に呼び出された理由が彼にわかったのは、それからあと三時間もたってからのことであつた。というのも、その話の初めのほうはクウェンティンがすでに知っていることだったからである。それは彼がこの二十年間おなじ空気を呼吸し、父からサトベンという男の話を聞かされてきたあいだにおのずと受けついできたものの一部、一八三三年六月のあの日曜の朝から一九〇九年のこの九月の日の午後にいたるまでの男自身が呼吸したのと同じ空気をこの町——ジェファスン——が八十年にわたって受けついできたその遺産の一部であつた。そうだ、素姓も知れぬあの男は、あの日曜の朝、馬に乗って初めて町に姿を現わし、どうやってかはわからないがともかく土地を手に入れて、見たところなにもないのに家屋敷を建て、エレン・コールドフィールドと結婚してふたりの子供をもうけ——娘と、まだ花嫁にさえならないその娘を寡婦にしてしまった息子と——そして非業の（ミス・コールドフィールドならすくなくとも、当然の、といっただろう）最期をとげ、いかにも彼らしい生涯を閉じたのだ。クウェンティンはそういうものといっしょに育ってきた。単に名前だけがいろいろ入れかわり、しかもその数は限りなかった。彼の幼年時代はそうした名前でもちみちていた。彼のからだは敗残者たちの名が朗々と響きわたるがらんとした広間だった。彼は一個の存在、一個の実体ではなく、彼はひとつの共和国であつた。彼はかたくなに過去をふりかえっている亡霊たちのひしめきあう営舎であつた。あの病を癒してくれた熱から四十三年たつたいままだ回復期にあり、自分たちが闘つた

のはほかならぬその熱とであって、病氣とではなかったことも知らずに熱から覚めきらず、熱のために衰弱してはいないけれども病は脱し、しかもそのことが不能たることを免れたことであるとも気がつかずに、現に悔恨にひたりながらかたくななまでに意固地になって熱の向うの病をふりかえて見つめているあの亡霊たちの。

（「だけどなぜほくにその話をするんだろう？」馬車でまた引き返してくることを約束してやっと彼女から解放されたクウェンティンは、その晩、帰宅してから父に訊いてみた。「どうしてほくにその話をするんだろう？」土地でもなんでもいいけど、とにかくそんなものにあの男もとうとう嫌気がさしてからというものは運勢が変わり、破滅してしまつたなんて話が、ぼくとなんの関係があるんだろう？ そのために一家が破滅しようとか関係ないじゃないか。ぼくたちの名前がサトベンだのゴールドフィールドだのであろうがあるまいが、いづれ運勢が変わっていつかはみんな破滅することになるんだらうに」

「うむ」とコンブスン氏はいった。「昔はね、南部ではわしら男性が女たちを淑女にしてやつたもんだ。ところが戦争が始まつてその淑女たちも亡霊になつてしまつた。だからわれら紳士たるものは亡霊となつた淑女の話を聞いてやるしかあるまい？」それから氏は、「あの女がおまえを選んだほんとのわけを知りたいか？」といった。夕食後、ふたりはヴェランダの椅子に坐り、ミス・ゴールドフィールドがクウェンティンに來訪してくれるようにと指定しておいた時間のくるの

を待つていた。「それはね、あのひとにはだれか味方になつてくれる者が要だからさ——だれか男が、それも紳士で、しかもまだ若くて彼女の望むことを彼女の思うとおりにやれるような者がな。おまえのお祖父さんはサトベンがこの郡で持つた唯一の友人といつてもいいような人だつたから、そこでおまえに白羽の矢が立つたわけだ。おそらくあのひとはサトベンがお祖父さんになにかやつと自分のことを話したものだと思ひこんでいるんだらう。婚約とまでもいかなかったあの婚約のこと、反古になつたあの夫婦約束のことをな。もしかしたらお祖父さんに、いざというときになつてあの男との結婚を拒んだわけを話したのかもしれない、そしてお祖父さんがこのわしに話し、わしがおまえに話したかもしれない。だから、ある意味じゃ、あの事件は、今夜あのひとの家でどんな話がでるか知らないが、とにかくまだ内輪のことだし、家庭内の秘密は（それが秘密といえるならだが）まだ漏れてはいないわけだ。仮にお祖父さんの友情がなかったらサトベンはこの土地にちゃんとした地盤をきずくことができなかったらうし、もしそうした地盤をきずいていなかったらエレンと結婚することもできなかったはずだ、とまあそんなふうには彼女が思ひこんでいるらしい。だからたぶんあのひとは、やつのために自分と家族がこうむつた迷惑については、お祖父さんの血をひくおまえにも責任の一端はあるとでも考えているんだらう」

そうであらうとあるまいと、ともかく自分が選ばれた理由がなんであれ、そこまで話がすすむにはまだだいふ時間がか

かりそうだとクウェンティンは考えていた。一方そのあいだも、消えてゆく彼女の声に反比例するように、彼女が許すことも恨みをはらすこともできないあの男の呼びさまされた霊鬼が、ほとんど生身の实体をそなえ、不変の姿をおびてきた。みずからは地獄の瘴氣、救われぬ者の放つ妖氣につつまれ、そのさなかにあって、平穩な、もはや危害を加えるおそれもなく、またさして注意をばらうでもないようすをしながらその霊鬼は冥想にふけていた（彼女がどうしても与えようとしなかったあの平安は得られなかったが——彼はおよそ疲れを知らぬ男だった——まるで彼女の怨讐のおよばぬところにいることが動かせない事実であるかのように、冥想し、もの思いにふけり、ちゃんと感覚もそなわっているようであった）——この悪鬼のごとき形相をした亡霊は、ミス・コールドフィールドの声がつづいているうちに、クウェンティンの眼前でふたりの小悪鬼の姿へと変幻し、この三つの亡霊が背景にしりぞいて第四の亡霊が現われ出た。これがその母親、死んだ姉のエレンだった。この涙を知らぬニオベ、さながら夢魘によるかのようにあの悪霊の子を孕み、生前も生きているとは名ばかりで、悲嘆にくれても涙ひとつ見せなかったこの女は、ひとり生きながらえたとかひとり先立ったとかいうのではなく、まるでこの世に生きて生まれたことがなかったかのように、いまではもう薄らいで意識にさえおぼらなくなった悲しみをたたえていた。クウェンティンの目には彼ら四人が、ちょうど色褪せた昔の写真が引き伸ばされて声のしている背後の壁に掛けてあり、しかも当の声の主たるミス・コ

ールドフィールドは、それ以前にこの部屋を見たことがなかったみたいに、そこにそんなものがあるとは知らないでいる、そんな写真のように、格式ばった無気力な品位をよそおって、当時の因襲的な家族群像どおりにならんでいるのが見えるようだった——その幻影はクウェンティンにとってすら異様な矛盾した、奇怪な雰囲気をつたえ、なにか不可解な、（二十歳の彼にとっても）どこか異常な群像だった——最後の者でも二十年まえ、最初の者は五十年前も以前に死んでしまったこの一家が、死んだような家の風通しのない暗がりのなかから呼び起こされて、おそろべき不屈の執念に憑かれた老女と、黙って話を聞きながら苛立っている二十歳の青年とのあいだに現われたのだ。この青年は老女の声がしているあいだも、こんなふうに自分の心につぶやいていたへひとを愛するにはおそらく充分そのひとを知っている必要があるけれど、四十三年間もだれかを憎みつづけていれば充分そのひとを知るようになるだろうから、おそらくそのほうがむしろいいんだ。だれだって四十三年もたてばあなたを驚かすことはできなくなり、あなたを満足させることも夢中にさせることもできなくなるのが普通なんだから——それにおそらくそれ（その声、その話、信ずることも耐えることもできないその驚愕）も、かつては大声で叫んだことがあったのだろう、とクウェンティンは考えていた——彼女がまだ若くて悔恨を知らない不屈の娘、不可解な情況や残酷な事件を告発するだけの気概ある娘であった遠い昔には、だがいまは違う、いまはただ、サトベンの死という決定的な完膚なき侮辱によつてはすかしめられ裏切られたあの昔の屈

辱、昔の怨讐にとりつかれて、四十三年間も戦陣を張りつづけてきた孤独な不満やるかたない老醜の女体にすぎないのだ。「あの男は紳士ではありませんでした。とても紳士などいえたものではありませんでした。彼は二挺拳銃を持ち、馬に乗って当地へやってきたのですが、その名前は以前にだれひとり聞いたこともなく、はたして彼の本名かどうか怪しいものでした。馬や拳銃だって彼のものかどうか怪しいものでもあれ彼はどこか身をかくす場所を捜していたのですが、ヨクナバトウファ郡がそれを彼に提供してやったのです。彼は他人からや、後には自分を捜しに入れかわり立ちかわりやってくるかもしれない余所者から身の安全をまもるために顔役の保証を求め、ジェファスはそれを彼に与えてやりました。次に彼は名望らしきもの、だれか貞淑な女を楯にしておく必要を感じました。そうしておけば、仮に自分を庇護してくれた人たちが軽蔑と恐怖と激怒をおぼえて自分に反旗をひるがえさざるをえないような日が必然的にやってきた場合でも、そういう人たちにたいしてさえ自分の地位をゆるぎないものにしておけますから。それを彼に与えたのがわたしとエレンの父というわけでした。いえ、べつにエレンを弁護するつもりはありません。弁護しようにも、まだ若くてうぶだったということしか弁解の余地のない、世間知らずのロマンチックなお馬鹿さんでしたから。世間知らずのロマンチックなお馬鹿さん、それが後に若いとかうぶとかいいう言ひ訳がたたなくなつてからは、世間知らずの女、愚かな母親ということになつてしまい、自尊心と安らぎとを代償にして手に入れた

あの家で臨終の床についていたときですら、そこにはまだ花嫁にもならないうちにもう寡婦同然になつてしまった娘のほかにほだれひとりおりませんでした。その娘も、それから三年後にはまだなんにもしないうちに完全に寡婦になつてしまつたし、息子ときたら生家とはすでに縁を切つていて、その後あと一度だけ戻つてきたのを最後にふつつり姿を消してしまつたのですが、それというのも人殺しを、いわば兄弟殺しをやつたからなのです。それからあの鬼のごろつきの悪魔みたいな男はヴァージニアへ出征しておりましたが、あそこでなら彼を地上から抹殺する絶好のチャンスがいくらでもあつたのに、エレンとわたしにはいつか彼が帰ってくるだろうとわかつていましたよ、南部軍の兵士がばたばた斃れたつてやつには弾なんか当たりつこないってことが。そんなわけで、エレンにすればまだ子供のわたしに、いいですか、助けてやつてと頼まれた当の娘より四つも年下の子供だったこのわたしに『この娘をまもつてやって。せめてジュネーデイスはまもつてやってね』っていうしかなかつたんですよ。ええ、世間知らずのロマンチックなお馬鹿さんでした。明らかに父の氣持を動かしたあの百平方マイルの農園も、あの大きな屋敷や、日夜多くの奴隷をかき集めるといふ贅沢も——これは、叔母を感じさせたといわれないまでも、叔母の氣持をやわらげたものでしたが——ふいにしてしまふなんて。とんでもない。馬に乗つてまでふんぞり返ろうというような、あんなずうずうしい男なんか——どだい（娘をそんなやつに嫁にやろうという父も含めて）ひとの知るかぎり過去というものを

まるつきり持たないか、あるいはそれを明かそうとしない男——あの男は、どんな蛮地から逃げてきたにせよそういう土地では彼のほうが怖いものとみえ、自分ひとりで追いかけてつかまえてきた野獣みたいなやつらの一団と、こちらは逆にその黒人ばちちに追いかけてつかまったらしいあのフランス人の大工とを従え、二挺拳銃をさしてどこからともなく馬で町に乗りこんできたのです——その男が、この町に逃げこんで来て、どうやってかはだれも知りませんが、なにも知らないインディアンからまきあげたあの百平方マイルの土地と、まるで郡役所みたいに大きな屋敷とを隠れ蓑に、名士面をして素姓をかくしてしまつたのです。窓も扉も寝台もないその屋敷に、彼は三年も住んでいましたが、まるで曾祖父さんの代からそっくり受けついで恩賜の永代財産でもあるかのように、まだサトベン屋敷と呼んでいました——家庭と地位、妻と家族といったものを、それが自分の素姓をかくすために必要なので、その他いろいろ立派に見えそうなものといっしょに受け入れたのです。あの男なら、藪のなかにいても求める保護が得られるとなれば、どんなに不快なことでも、たとえ茨の苦痛であつても甘受したでしょうが、それと同じです。

「いいえ、紳士なんてとんでもない。エレンと結婚したところで、たとえエレンのような女をわんさと娶つたところで、あんな男が紳士になるわけはなかつたでしょうよ。どだい彼は紳士になろうという気がなかつたし、紳士に思われたいと思つていませんでした。いえ、そんなことは必要なかつた

のです。なにしろ彼にとつては、ひとが見たり読んだりできるような結婚許可証（とか、あるいはなんでも箔のつきそうな証書）にエレンの名前とわたしたちの父の名前が書かれさえすればよかつたんですから。それと同じで、約束手形にもわたしたちの父の（あるいはだれか名望ある人の）署名が欲しかつたことでしょう。なぜなら父はテネシーで祖父がどんな人だったか、ヴァージニアにいた曾祖父がどんな人だったかをちゃんと知っていて、近所の人や町のひとたちもわたしたちが知っていることを知っていましたし、わたしたちのほうでも、わたしたちが知っているのをみなさんがご存じなのは承知しておりましたから、仮にあの男の名前や素姓をわたしたちが偽って伝えたとしても、みなさんが本当になさるだろうことはわかつておりました。逆に、ひと目でもあの男を見たら、彼がだれでどこからなんのために当地へやってきたのかをじかに聞きただしたところで彼が嘘をつくだろうことは、だれにでもわかつたことでしょう。彼が堅く口をつぐんで語ろうとしないのは明らか事実でしたから。彼が名望というものを隠れ蓑に選ばねばならなかつたその事實は、彼が名望とは反対のなにかひとにいえないうような暗いものから逃れようとしていたにちがいないということの（もしまだ証拠を見たいというひとがいるのなら）なによりの証拠でした。なぜなら、彼はまだ若かつたのですから。彼はそのとき二十五歳でしたが、二十五の若者が金だけが目当てで処女地を開拓したり新天地に農園を建設したりするような苦難や窮乏に自分からすすんでとびこむものではありません。明らかにひ

とに話してもさしきわりのない過去というものを持たない若者がそんなことをするわけがありませんよ。なにしろ一八三年のミシシッピといえば、河にはいづれもダイヤをしこたま持った飲んだくれのおっちょこちょいどもを乗せた蒸気船がひきもきらず、しかもやつらは目的地のニューオーリーonzまで行かないうちに綿花でも奴隷でも気前よく投げだそうというご時勢でしたからね——迷惑どおりにいかないとしてもせいぜい別のごろつき連中が邪魔に入るとか、砂州に乗りあげるとか、ひどくても麻縄を扱うぐらいのもので、一晚だけ我慢して船に乗っていればばろい儲けができるというのに、なんでそんな苦勞をするもんですか。それに彼はヴァージニアとかキャロライナといった古い静かな地方から余計者の黒人どもを引きつれて新天地を開くために派遣されてきた青年とも違います。なにしろ彼が連れてきた黒人どもをひと目見れば、たとえやつらがヴァージニアやキャロライナよりずっと古い地方からやってきたとしても（たぶんそうでしょうが）、そこが静かな所だとはお世辞にもいえないかったです。うからね。それにまた彼の顔を一度でも見た人なら、彼という男は、たとえ自分の買ったあの土地に金が埋蔵されていて、だまっけていても自分の手にころがりこんでくることわかっていても、実際に手がけた農園つくりなんて仕事よりはまちがいがなく金銭になる蒸気船に乗り組んで麻縄でもいいじているほうが似合いの男だと思つたことでしょうよ。

「いえ、わたしはなにもエレンを弁護するつもりはありませんし自己弁護しようとも思いません。彼を観察する期間がわ

たしには二十年もあつたのに、エレンにはたった五年しかなかったのですから、弁解の余地がないのはむしろわたしのほうです。しかもエレンはそのたった五年間でさえろく彼の顔も見ず、彼がなにをしているのか人づてに聞いていただけでしたし、しかもその五年間に実際に彼がやっていたことの半分も知っている人はいませんでしたから、聞くといつても半分以上は聞けなかったわけですし、おまけにそのわかっていることの半分は、娘はおろか妻にさえいうもはばかりであるようなことでした。いつてみれば、彼は当地へやってきて五年間いかかわしいショーを興行し、それにたいしてジェファスンの町はすくなくとも彼のやっていることを女子供に知らせないというぎりぎりのところで彼を保護して、その娯楽に報いたようなものでした。しかしわたしは一生涯、彼を見守っていました。一生涯と申しますのは、どういう理由によるものかいまもってわかりませんが、あきらかにわたしの人生は四十三年まえの四月のある午後に終わるべく運命づけられていたからです。つまり、そのときまでのわたしならかうじて生きていたといえるかもしれません、それ以後のわたしはとも生きていたとはいえないでしょうからね。わたしは姉のエレンの身に起こったことをこの目で見ました。エレンはほとんど世捨て人のような状態で、ふたりの運命の子が成長するのをなすすべもなく見守っているばかりでした。わたしはエレンがああな屋敷とあな自尊心のために支払った代償の大きさをまざまざと見せつけられる思いでした。あの夜エレンが教会のなかへ歩み入ったときに署名した、自尊心と

か満足感とか平和とかその他もろもろのものにたいする約束手形が、つきつきと満期になってゆくのをこの目で見たのです。ジュディスの結婚は、まったくなんの理由もなしに禁じられました。エレンが死ぬときは、あとに残してゆく子供たちの世話を頼もうにもまだ子供のわたししかおりませんでしたし、ヘンリーは生家と縁を切って家督権を捨ててしまひ、その後戻ってきたかと思えば妹の恋人の血まみれの死体を妹の婚礼衣裳にむかつて投げつけるようなまねをしでかす始末でした。それからあの男が戻ってきたのです——あらゆる不幸の原因となり、自分が犠牲にした者のだれよりも長生きした悪の張本人であるあの男——その男がつくったふたりの子供は互いに身を滅ぼして彼自身の血筋を絶やしたばかりか、わたしの血筋までも絶やしてしまいました。それなのにわたしはそんな彼との結婚に同意してしまいました。

「いえ、わたしはなにも自己弁護しようとしているのではありません。若さのせいだとは言いますまい。なにしろ一八六一年^(南北戦争)以後の南部では、男も女も黒人も驃馬^{驍馬}も、生命あるすべてのものが、およそ若い時代というものを持たなかったばかりか、青春期をへてきた大人たちの口から、若いということがどんなものかを話に聞く時間や機会すら持たなかったような状態でしたからね。それにまた、若い女ばかりでちょうど適齢期にあったわたしが、あたりまえなら親しく知りえたかもしれない若者たちの大半を敗戦に終わった戦場で失ってしまったやさきに、たまたま彼と同じ屋根の下に二年間も住んでいたという事実、つまり身近な所にいた男が彼だ

ったという事実を弁解しようとも思いません。それからまた、孤児で女で貧乏人だったわたしとしては、たったひとりの身内であつた死んだ姉のつれあいにその日その日の口すぎを求めざるをえなかったのは当然で、けつして囲われたのではないのですが、そうした生理的要求を言い訳にするつもりはありません。もっとも、人さまからとやかくいわれる筋合いはないと思いますが。二十歳^{はたち}のみなし子で頼るものとなない若い女の身のわたしが、いやでも食べさせてもらわねばならなかった男からのちゃんとした結婚申し込みを承諾することによって、自分の立場をはっきりしたものにしておきたかったばかりでなく、女きょうだいのだれもその名を汚したことのない一家の名譽をまもうと願ったのは当然のことでしょうからね。それから、とりわけわたしは自己弁護はたくありません。わたしという女は、両親も身の安全もなにもかも奪い去った一大虐殺をかううじて免れ、自分にとって生きる意味のいっさいが、姿はただの男でも英雄にふさわしい名と体軀^{たいく}をもった少数のひとたちの足下に崩れ落ちるのを目にしてまいりました。いいですか、わたしという女は、若いころそういう男のひとりである彼と二六時中顔をつきあわせるはめになったのです。なるほど彼の素姓はいかがわしいかもしれませんが。わたしが彼について考えたり知っていたりしたこともあまり芳しいものではありませんでした。にもかかわらず、彼はわたしが生まれた南部の土と伝統のために堂々四年間も戦ったひとです。そのように戦ったあの男は、よしんばきわめつけの悪党であつたにせよ、若い娘の目には、たとえ単な